



シンガポール

派遣期間 2014年4月～2017年3月

## シンガポール日本人学校チャンギ校実践報告

～ マーライオンが見守る Fine City ～

北広島市立緑ヶ丘小学校

教諭 小林 圭

### 1 シンガポールについて

シンガポールはほぼ赤道直下に位置し、アジアと中東、欧州、オーストラリアを結ぶ海上交通の貿易拠点として古くから栄えた。1965年マレーシアから分離独立。建国の父、リークアンユーの政治により急激な経済成長をとげた。貿易、工業などを主産業とし、東南アジアにおける経済、金融、交易の中心地となっている。



1年を通じて日中は30℃を超え、蒸し暑い天候が続く。国土面積は719 km<sup>2</sup>で、淡路島とほぼ同じ面積である。小さな国ではあるが、人口は約560万人である。人口密度は世界第二位で、民族は中華系、マレー系、インド系が大多数を占める多民族国家である。そのため、中国語、マレー語、タミール語、英語の4つが公用語となっている。宗教においても仏教、イスラム教、ヒンズー教などがある。

第二次世界大戦中、シンガポールは日本の占領下におかれ「昭南島」と呼ばれていた。そしてこの時代は「暗黒の時代」と呼ばれるほどシンガポール人にとっては苦悩の日々であった。国内のあちこちには記念碑があり、シンガポールの人々は、当時の出来事を決して忘れてはいない。しかし、現在の人々は日本を友好国として受け入れ、経済発展のパートナーとしてとらえている。シンガポールの人々は「許しましょう。しかし、決して忘れまい。」というスタンスで日本人と接している。現在、約1550社の日本企業がシンガポールに進出し、在留邦人数は約36,000人である。

### 2 シンガポール日本人学校について

#### (1) シンガポール日本人学校の概要

シンガポール日本人学校は、シンガポール日本人会の学校運営理事会が運営している私立学校である。小学部（クレメンティ校、チャンギ校）と中学部（ウェストコースト校）の3校がある。クレメンティ校に約800人、チャンギ校に約950人、中学部に約500人の児童生徒が通っており、世界の日本人学校の中でも規模が大きな在外教育施設の一つである。小学部の2つの学区は、居住地区によってクレメンティ校とチャンギ校に分かれている（チャンギ校には特別支援学級が設置されている）。



古くは1912年に補習校として開設されたが、第二次世界大戦を機に一時閉鎖、1964年に再開され、1966年にシンガポール政府より認可され日本人学校となった。開校当初は教員3名、児童数27名。1968年児童数増加により校舎をクレメンティに移転、同年には中学部補習授業が開始された。1970年に中学部開設、1971年中学部移転、1996年クレメンティ校の一部をチャンギ校に移転、1998年チャンギ校完全移転。これにより中学部1校、小学部2校体制が始まり、現在に至っている。昨年度は、日本人学校開校50周年の年であり、チャンギ校にて盛大に記念式典が行われた。2016年のチャンギ校職員は総勢91名である（文科派遣教員 23名 財団派遣教員 23名 現地採用教員 2名 事務職員 6名 英会話スタッフ 15名 イマージョンスタッフ 6名 その他にメンテナンスやセキュリティースタッフが働いている）。

## (2) シンガポール日本人学校小学部における国際理解教育

子どもたちは日常的に多言語、多民族に触れる機会が多くあり、国際理解教育の取り組みを展開するには最適な環境で生活している。国際理解教育での学びを実践する場が豊富に存在している。子どもたちは自ずとシンガポールでは人権や多様性が尊重されることを知ることができる。

保護者や教員は、子どもたちがシンガポールでの経験や日本人学校での学習によって、将来、グローバルな社会で活躍できる人材に育つことを強く願っている。

### ①英会話教育

小学部では、楽しい少人数授業「使える英語」を目指して、学習指導要領に規定された学習内容だけでなく、シンガポールだからこそ実践できる独自のカリキュラムで授業を行っている。

現地校交流、ホームステイ、ネイティブ教師による水泳や音楽の英語イマージョン教育（英語で学ぶ授業）などをはじめ、習熟度別少人数授業による英会話教育に力を入れている。母語である日本語をしっかりと学ぶことで思考力を伸ばし、日本人としてのアイデンティティーを確立させながら、将来世界で活躍するために不可欠な「使える英語」の習得を目指している。

英会話教育の基本内容はクレメンティ校とチャンギ校で共通である。各校15名（両校合わせ計30名）の英会話スタッフが1年生～4年生は週3回、5・6年生は週4回の授業を担当している。

英会話のクラスは習熟度別に12段階に分けている。クラス編成は、授業での取り組みの様子やスペリングのテストから各学期のはじめに判断している。新入生や編入生は最初の数回の授業の様子でクラスが決定される。教師の多くはネイティブスピーカーが担当している。教科書「Hi Friends」を使用し、多角的なアプローチにより総合的な英語力をつけることを目標にしている。保護者との連携を深めるため英会話授業の参観が定期的に行われている。また、学期ごとに担当教師が英語で書いた成績表を出している。



### ②現地校との交流学習

国際理解教育の目標は「豊かな表現力を身につけ、シンガポールの中で様々な文化に進んで関わろうとする子どもの育成」である。全学年に、現地校との交流が年間計画の中に位置付けられている。訪問しての交流、招待しての交流と計2回実施される。現地校との交流は「英語」で行われるため、英会話スタッフに協力を得ながら、交流に必要な言葉や表現を身に付け、当日の活動に臨んでいる。現地に訪問しての交流は、現地校の計画、進行で行われる。実際に訪問して、現地校の教諭の説明を聞きながら交流を深めていく。

2016年度のチャンギ校1年生はエライヤス校と学校交流をした。訪問しての交流の際は、両校の代表児童による挨拶に続いてダンスを踊った。その後、KutiKutiという日本のおはじきに似たゲームを楽しんだ。相手校のパートナーとの英語でのやりとりが楽しくて、会場には笑顔が溢れていた。

#### ※チャンギ校での実践例 1年生（エライヤス校を招待しての交流） 2016年度

◎前日までの準備 3時間

- ・（1時間目）エライヤス校の子どもたちと交流が始まることを知る。

エライヤス校の子どもたちとも積極的に関わろうとする意欲や態度を育てる。

- ・(2時間目) 名刺交換の英語表現を覚えよう!  
基本的な挨拶表現を知り、積極的に関わろうとする意欲や態度を育てる。
- ・(3時間目) 手裏剣の作り方を覚えよう。手裏剣の的を作ろう!  
手裏剣の作り方を覚え、交流本番の時にエライヤス校のお友だちに英語で教えられるようにする。

#### ◎当日の流れ(手裏剣の作り方と手裏剣遊び)

英会話スタッフが日本語と英語で、以下のような説明をしながら進める。

<司会>今からみんなで手裏剣を作ります。手裏剣は **throwing stars** や **ninja stars** と英語ではよばれており、忍者が使うものでした。忍者は侍時代のスパイで、手裏剣は彼らの武器です。折り紙で手裏剣を作った後は、手裏剣を使って遊びます。頑張って仕上げましょう。先生が作り方を教えてくれます。よく見て作りましょう。エライヤス校のお友だちでわからない人はチャンギ校のパートナーに聞いてください。

(作成後) みなさん、手裏剣が完成しましたか。

では今から手裏剣を使って遊びます。各グループごとに1列に並んで、順番に手裏剣を投げます。当たったところの得点をしおりに書き込みましょう。全部で3回投げます。各学校が交互になるように並んで、グループで1列を作ります。

(手裏剣を的に向かって投げる) 終わったグループからその場に座りましょう。点数の多い人に拍手をしましょう。



#### ※他学年の交流 2016年度

##### ・2年生 エライヤス校との交流

訪問しての交流では、自己紹介後CIMOダンス、インドの伝統的な模様塗り絵、扇子作りを行った。招待しての交流では、チャンギ校の校舎を案内したほか、英語とマレー語で歌った「シンガプーラ」を披露したり、折り鶴を作った。日本とシンガポールの友好50周年の節目の年であったので、鶴を折ることを通して平和についても一緒に考えた。

##### ・3年生 テマセク校との交流

訪問しての交流では、障害物リレーや民族衣装塗り絵を楽しんだ。仲が良くなった友だちからメッセージ入りのカードをもらうことができた。招待しての交流では、日本の駒や剣玉などの伝統遊びを英語で説明した。遊びのお世話をしながら、相手の目を見て説明をした。

##### ・4年生 テマセク校との交流

訪問しての交流では、名前や好きなものなどの自己紹介、カード交換、体を動かしてのゲームや塗り絵などの交流を行った。招待しての交流では、グループごとの福笑いやチーム対抗の玉入れを行った。チェッコリの音楽に合わせての玉入れは、大変盛り上がった。

##### ・5年生 イーミン校との交流

訪問しての交流では、日本人学校では馴染みのないキャンティーン(食堂)で軽食を食べたり、ヒップホップダンスを一緒に踊った。また、Zero pointやChapteh, 5 stonesという伝統的な遊びを体験した。招待しての交流では、綱引きや剣玉、駒、切り紙といった日本の伝統的な遊びや物作りを一緒に行うことを通して交流を深めた。また、保護者の協力のもと、12名の子どもたちが互いの家を行き来するホームステイも実施した。

## ・6年生 イーミン校との交流

訪問しての交流では、キャンティーンで飲食したり、剣玉やしおり作り、ミニゲームなどの活動に参加し交流を深めた。招待しての交流では、スクールツアーとしてイーミン校の子どもたちに学校内の施設を紹介した。和室に興味を示したイーミン校の子どもたちに、練習した英語表現を使って一生懸命に説明した。また、凧作りや習字の活動を通して日本文化を伝えた。

どの学年の子どもたちも、はじめは緊張している様子が見られていたが、次第に雰囲気慣れ、英語での会話や説明を意欲的に行っていた。交流後には「もっと英語で話したい！」という声がたくさん聞かれている。これまでに学習した英語表現を実践的な場面で使うだけでなく、積極的に互いの文化に触れ合うことができた。学校交流を通して、異文化を体験し、シンガポールの同年代の子どもたちがどのような生活を送っているのか知ることができ、有意義であった。

## ③シンガポール日本人学校小学部における英語イマージョン教育

### ・英語イマージョン教育の指導教科

英会話の他に英語で学習するイマージョン音楽を各学年週1～2時間、イマージョン水泳を各学年週1時間実施している。イマージョン音楽では、各学年の標準指導時数の半分をネイティブの音楽教師が指導している。また、イマージョン水泳は体育科の標準授業時数のうち年間30時間を水泳学習に充てて、シンガポールスイミングクラブの指導員2名が英語で指導している。

### ・イマージョンの歴史とその背景

イマージョンとは、immersion:浸す(される)こと;没頭、はまり込むことを意味し、1965年カナダ、ケベック州モントリオールの幼稚部でフランス語によるイマージョン授業を行ったのが始まりとされている。70年代に入って米国でスペイン語のイマージョンプログラムの開発に成功した。

イマージョンプログラムのねらいは、2カ国語で話す・聴く・読む・書くことができるように推進することである。教師は「英語を教える」のではなく、音楽を「英語で教える」のであり、子どもたちは音楽を楽しみ、学びながらその過程で英語を習得していくのである。そして、英語に没頭(イマージョン)することをねらっている。また、ネイティブの先生との会話を通じて自然な言い回しや表現を身につけることもねらっている。

### ・英語イマージョン教育の実際(1年生)

#### <イマージョン水泳>

“Good morning, boys and girls!”

“Good morning, Mr.Chen and Ms.Charissa!”

この挨拶から、イマージョン水泳の授業が始まる。

男女一列ずつに並び「one, two, three, four, five, six, seven, eight!」元気なかけ声で準備体操が始まる。

その後、シャワーを浴び、ビート板を持ってのバタ足、息継ぎの仕方と、スムーズに授業は流れる。

“Do slow strokes.” “Kick on the count of 3.”などの指示も1年生の子どもたちは理解できている。日本の学校から編入したばかりの子どもは、日本の水泳授業とは違ってハイペースで進む授業に、初めのうちは戸惑う。しかし、年間を通して水泳の授業ができるので、泳ぐ距離がぐんぐん伸びるようになる。また、先生に質問をしたり、おしゃべりをしたりして、会話をするということにも慣れる。



## <イマージョン音楽>

「one, two, threeー！」Ms. Carol のかけ声で、1年生の子どもたちは鍵盤ハーモニカで“Happy Days”を弾き始める。“One more time!” 先生の手拍子や身振りで、1年生も指示が理解できている。また、教室の後ろで一列になり、“Londonbridge is falling down, falling down…”を歌いながら先生の腕のアーチの下をくぐり抜ける遊びをしていた。チャイムが鳴ると、“Thank you Ms Carol and Ms Yong!”と笑顔で言い、子どもたちは帰っていく。

イマージョン教育の成果は、7月の音楽発表会や2月の水泳記録会で発揮される。それぞれの技能と英語力の伸びと共に、英語での表現やコミュニケーションを楽しむ姿などが見られる。

子どもたちは、シンガポールでの生活や国際理解教育の授業の中で「偏見や差別をしてはいけないこと」を知ることができたのではないかと思う。

### (3) シンガポール日本人学校小学部チャンギ校における特別支援教育

シンガポール日本人学校小学部チャンギ校では、個別の配慮を必要とする児童を受け入れ、特別支援教育を実施している。特別支援教育コーディネーターが中心となり、支援教員が保護者と「個別の指導計画」や「個別の支援計画」を作成し、障がいや成長に応じた支援に努めている。また、通常学級の担任はユニバーサル・デザインの授業展開を心がけている。

#### ①特別支援教室の種別

- ・ドリーム…生活体験型指導を重点として、特別支援学級に籍を置き、実態に応じて交流学习を行う。
- ・ステップアップ…通常学級に籍を置き、少人数により、教科学習に重点を置いた指導を行う。
- ・トライアングル…通常学級に籍を置き、教科等の補充学習を週2時間程度行う。

#### ②教員数

- ・コーディネーター…1名
  - ・ドリーム及びステップアップ…3名
  - ・トライアングル…1名
- 計 5名

#### ③平成 27 年度特別支援教育対象児童在籍状況

- ・ドリーム…4名
  - ・ステップアップ…4名
  - ・トライアングル…6名
- 計 14名

#### ④児童の募集

- ・学校のホームページにて、児童の募集を年に一回行っている。募集後、就学指導委員会で面接試験を実施し、就学の可否について審議、決定している。本校のみに特別支援教室が設置されているために、特別な配慮が必要な児童が入学、編入する際は、本校の校区に居住する必要がある。

世界中の日本人学校をみても、特別な配慮が必要な児童を受け入れることのできる施設は限られている。こうした中で、シンガポール日本人学校が日本国内と同じような支援環境を整えてきたことは、学校運営理事会や事務局の尽力の賜物である。一方で、日本国内同様シンガポールでも、子どもの障がいや保護者のニーズが多様化してきており、これら全てに日本人学校の組織、施設で適切に対応するには難しい部分もあった。現地では、相談機関、療育機関が限られているため、特別な配慮が必要な児童に対する連携や相談を日本国内と同じように行うことは難しい。さらに教員の派遣期間が2～3年と短く異動が激しいため、長期的に子どもと関わり、子どもの成長の確認することができないといった課題もある。今後も児童、保護者が安心して通学、通級できる環境や支援体制の整備が望まれる。

#### (4) シンガポール日本人学校小学部チャンギ校におけるICT教育

情報通信技術の進化と、スマートフォン&タブレット端末の加速度的な拡散を機に、教育の分野においても次世代テクノロジーを駆使した新たなメソッドが注目を集めている。なかでも世界各国の教育関係者が熱い視線を注ぐのが、この分野で最前線を走るシンガポールである。日本からも国の視察団や教育研究者、現場教師が多く視察に訪れている。日本の教育関係者がシンガポールの情報教育を学ぶ意義は大きい。

シンガポール日本人学校小学部の情報教育もシンガポール同様に設備や実践が注目されており、日本から視察に訪れる先生も少なくない。PC, iPad, Apple TV, Chromebookなど環境が整備されており、日本国内の環境より恵まれている状況にあると言える。

私は、赴任期間の3年間、校務分掌では情報部を担当し、情報教育機器の整備や活用についての研修に努めた。この章では、情報教育機器の紹介や1年生を担当したときの実践を紹介したい。

##### ①設備について

###### ・PC 端末

児童用のPCについては、計80台のノートパソコンが導入されている。日本人の教職員には、HDMI端子対応のノートパソコンが配置された。このため、職員室での作業だけではなく、教室でデジタル教書を用いて授業やプレゼンテーションなどができるようになった。

現地採用の英会話スタッフには、ChromebookやMacBookが配備された。

###### ・iPad

担任、専門科目担当の教員に一台ずつ、計52台配備された。児童用としては、7台使用できる。



iPadを安全に持ち運ぶためのショルダーバックや教室で拡大機器のように使用する際の固定具も教卓上に配備されている。



またApple TVが教室に配備されており、50インチのテレビにiPadの画面を美しく映し出すこともできる。

## ・ Chromebook

2016年度、Acerが40台導入され、各教室で使用できるようになった。PC教室に移動する必要がなくなり、自分の教室で調べ学習や文集の打ち込み作業ができるようになった。また、Chromebookは、起動する際に数秒しかかからず、作業したいときにすぐ学習できる長所がある。さらには、作成しているデータを共有して作業できる良さがある。時間の短縮といった利点のみならず、効率的な学習ができるようになった。



2017年度、AsusC100PAが80台配置された。AsusC100PAは、タッチスクリーン対応である。画面をiPadのように指で触って操作するので、マウスの操作に慣れていない低学年であっても、楽に作業することができる。

また、本体を収納ラックに入れ、充電している状態で保管できるようにもなった（ラック1台に本体が40台ずつ収納可能）。



## ・ Wi-Fi

アクセスポイントは各教室付近にあり、校舎全体で23ヶ所に設置されている。設置当初は、接続が不安定であったが、次第に改善された。

2クラス（50名）で、Chromebookを使用しても不具合はなかった。

PC教室では、印刷機もWi-Fi対応の機種となり、ケーブルが少なく、より整然とした教室環境となった。



## ②授業について

### ・ iPadを活用した授業 国語「かたかなをみつけよう」1年生



### ・ Chromebookを活用した授業



1年 算数「ひきざん」授業参観

1年生であっても、教育サイトやアプリを活用した授業が可能となった。

ゲーム形式の学習もクラス全員で一緒に取り組むことができ、得点を競うこともできるようになった（タイピングゲームなど）。

高学年では、学校文集「やし」の制作のために、児童一人一人がChromebookで原稿入力を行った。

以前は、PC教室に移動しての作業であったが、昨年度は、自分の教室で手軽に原稿を作成することができるようになった。

幸いなことに、私の赴任した3年の間に、シンガポール日本人学校小学部では、情報教育機器の整備が飛躍的に進んだ。学校運営理事会や事務局の支援や協力に感謝したい。また、シンガポール日本人学校中学部や小学部クレメンティ校の情報部担当者との連携や研修なしにはこの成果は得られなかった。

各校の先生方に厚く感謝申し上げたい。この3年の間に情報教育機器は、教師が子どもに教えるためのものだけでなく、子どもが学びを深め、効率よく学習するための道具として機能するようになってきている。子どもたちが学習のために自由に使う文房具になってきている。

現在、教員は「情報教育機器をいかに活用して子どもたちの理解を深めさせるか、子ども中心の学習をどう組み立てていくか。」ということ強く意識している。教職員の意識改革が大きく図られた。

今後も、豊かな国際感覚をもち世界の人々とつながろうとする子どもを育むために ICT 教育の充実が必要不可欠である。

### 3 シンガポールの暮らしについて

年間を通して高温多湿で、南国特有の木々や色鮮やかな花々を見ることが出来る。整備された道路や公園や街並みが美しく、東南アジアのオアシスとなっている。「Singapore is a fine city」と呼ばれるが「fine」には「すばらしい」の他に「罰金」という意味もあり、ガムの持ち込みやゴミのポイ捨て、政府批判の禁止など、実に様々な罰則があることも知られている。

生活においては治安が良いこともあり日本と同じように外出ができる。日系のデパートや書店、レストラン、医療機関などもあり不便なことは少ない。しかし、日本からの輸入品やブランド品などの物価は高い。一方、ホーカーと呼ばれる屋台での食事は大変安く、中国、インド、マレーなど各国の料理が楽しめる。

シンガポールは小さな島国なので、MRT と呼ばれている電車やバスに乗車すると一時間程度で国内の端から端まで移動できる。電車やバスの運賃は安く、初乗りが約 65 円、最高でも 200 円程度である。自家用車は高額で、派遣教員で所有している者はいない。車両の金額と同額の車両税がかかるためカロアラの相場が 500 万円程度である。

生活する上での困りごとは、ヘイズとデング熱である。ヘイズとは、隣国の焼畑農業や山火事の煙が流れ込むことによる大気汚染であり空気が白くかすむ。また、心肺機能に悪影響がある。ヘイズは、9 月頃が一番ひどく、数週間続くこともある。デング熱は、熱帯地域に流行するウイルス感染症である。蚊がウイルスを媒介するので、蚊を発生させない環境の整備や、殺虫剤散布などを行ってはいるが、根絶は難しく、年間を通して主に工事現場周辺で年間 5,000~20,000 人の患者が発生している。

### 4 まとめ

私が赴任した翌年の 2015 年は、シンガポール建国 50 周年、シンガポール日本人会創立 100 周年の記念の年であった。また 2016 年は、シンガポール日本人学校開校 50 周年と、どの記念事業も盛大に行われ、これまでの歩みを振り返り、これからの国や学校のさらなる繁栄を祈念する機会となった。長い歴史の中の節目、歴史の一ページを見ることができとても貴重な体験であった。これまで歩んでこられた両国先人達の苦労を考えると、心から感謝せずにはいられない。過去に悲しい歴史のあったシンガポールと日本だが、今は友好的な関係にあると言えるのではないだろうか。シンガポール人は「過去は変えられない。未来は変えられる。」と話している。「日本人は、今後を共に歩むパートナー」とも話している。平和の尊さをかみしめながら、今後も両国が友好関係を続けることができると強く願っている。

シンガポールで出会った子どもたちとの実践や、派遣教員と切磋琢磨しながら研修した経験を生かしながら今後の教育活動を励んでいきたい。



ホーカー



MRT